「浜辺の歌」にまつわる思い出

1994 年の 5 月だったと思いましたが、3 週間ほどマニラのフィリピン大学を訪れる機会がありました。滞在中にミランダ博士のお宅で、既にご高齢でいらしたお父様の元フィリピン大学教授・ミランダさん（ご専門は化学）にお会いし、そこで伺った話です。1943 年から 44 年にかけてのこと。当時フィリピン大学に入学したばかりのミランダさんは第二次大戦のさなか、ゲリラ隊“ラウール(Raul)”に所属していました。フィリピンには軍備といえるほどのものはなく、ゲリラ戦を展開する以外に抵抗の道はありませんでした。しかし、ミランダさん達のゲリラ隊は次第に日本軍に包囲され、ついに捕虜となってしまいました。捕まって身体検査を受けたとき、ズボンの
後ろのポケットに忍ばせていたものを察知され、出すように命じられました。命じられるままにハーモニカを取り出して将校に差し出したところ、「吹いて見ろ」と言われたので、当時フィリピンを占領していた日本軍が放送で流していた「ハマベノウタ」を吹いたそうです。日本軍の将校は、ミランダさんの吹く「浜辺の歌」に感動して心を
動かされ、彼をそのまま解放したということでした。実はその時、ミランダさんは軍の機密を記した文書を靴の中に忍ばせていたのですが、ハーモニカの一件のために、靴の中まで探られずに済み、命だけでなく、軍の機密も守ることができたという事でした。九死に一生を与えてくれた「ハマベノウタ」を、ミランダさんはそれからも忘れることはなかったということです。私は持参したフルートで浜辺の歌を吹き、歌詞を簡単に説明しました。
まさかこんなところで「浜辺の歌」出会うとは思いもしませんでした。

『浜辺の歌』
作詞：林　古渓　作曲：成田為三

（一）
あした浜辺を　さまよえば
昔のことぞ　しの(偲)ばるる
風の音よ　雲のさまよ
寄する波も　貝の色も

（二）
ゆうべ浜辺を　もとおれば
昔の人ぞ　しの(偲)ばるる
寄する波よ　返す波よ
月の色も　星の影も

以下の三番は元あったものが今では面に

出なくなったようです。これを見ると
詞の複雑な背景が思われます。

（三）
はやちたちまち　波を吹き
赤裳(あかも)のすそぞ　ぬれひじし
やみし我は　すでに癒えて
浜辺の真砂（まさご）　まなごいまは

4/27
お母さんの歌をもう２つ:
「母さんの歌」と「ふたあつ」

『かあさんの歌』
作詞作曲　窪田 聡

１　かあさんは　夜なべをして
　　手ぶくろ　編んでくれた
　　木枯らし　吹いちゃ
　　冷たかろうて
　　せっせと編んだだよ
　　ふるさとの便りはとどく
　　いろりの匂いがした

２　かあさんは　麻糸（あさいと）つむぐ
　　１日つむぐ おとうは
　　土間（どま）でわら打ち仕事
　　お前もがんばれよ
　　ふるさとの冬はさみしい
　　せめて　ラジオ聞かせたい

３　かあさんの　あかぎれ痛い
　　生（なま）みそをすりこむ
　　根雪もとけりゃ
　　もうすぐ春だで

畑が待ってるよ
小川のせせらぎがきこえる
なつかしさがしみとおる

『ふたあつ』
作詞　まど みちお　作曲　山口 保治

1　ふたあつ　ふたあつ　なんでしょね
お目々がいちに　ふたつでしょ
お耳もほらね　ふたつでしょ

2　ふたあつ　ふたあつ　まだあって
お手々がいちに　ふたつでしょ
あんよもほらね　ふたつでしょ

3　まだまだいいもの　なんでしょか
まあるいあれよ　かあさんの
おっぱいほらね　ふたつでしょ

4/26
子守歌はお母さんが赤ちゃんに歌い聴かせますが、幼児がお母さんに呼びかける「お母さんの歌」もいろいろありますね。まず、『おかあさん』と『ないしょ話』（それに比べて懐かしい「お父さんの歌」は浮かんできません。）

『おかあさん』
作詞：田中 ナナ　作曲：中田喜直

おかあさん なあに
おかあさんて いい におい
せんたく していた においでしょ
しゃぼんの あわの においでしょ

おかあさん なあに
おかあさんて いい におい
おりょうり していた においでしょ

たまごやきの においでしょ

『ないしょ話』
作詞 結城 よしを　作曲 山口 保治

１　ないしょ　ないしょ
　　ないしょの話は　あのねのね
　　にこにこ　にっこり　ね　母ちゃん
　　お耳へ　こっそり　あのねのね
　　坊（ぼう）やの　おねがい　きいてよね

２　ないしょ　ないしょ
　　ないしょの　おねがい　あのねのね
　　あしたの日曜（にちよう）　ね　母ちゃん
　　ほんとに　いいでしょ　あのねのね
　　坊やの　おねがい　きいてよね

３　ないしょ　ないしょ
　　ないしょの話は　あのねのね
　　お耳へ　こっそり　ね　母ちゃん
　　知っているのは　あのねのね
　　坊やと母ちゃん　二人だけ

4/23
桜は葉桜となり、ツツジをはじめ、いろいろの花が咲き始めました。土曜日に、3 年前まで住んでいた横浜市栄区で用事を済ませたあと、狝川に沿って大船駅まで歩きました。
「時計台」「鐘」「緑」ときて、ふと、浮かんで来た歌は「鐘の鳴る丘」。ずいぶん長いこと聞かなかった(と思う)歌にしてはメロディーがはっきりと浮かんで来ました。
なんでも、アメリカのフラナガン神父によって創設された「少年の町」(「この世に悪い子はいない。愛を持って接すれば、非行少年も必ず立ち直る」という精神を土台にしている)を、菊田一夫が「戦災孤児は誰が作ったのか、彼らがカッパライをするのは生きるためではないか」というメッセージを込めて放送劇にしたということで、昭和 22 年から 25 年にかけて放送。後に松竹で映画化もされています。ちなみに、岩手、群馬、長野に関連施設があることを今回はじめて知りました。歌詞の中の「俺ら」は「おいら」ですね。

『鐘の鳴る丘』
【作詞】菊田　一夫【作曲】古関　裕而

緑の丘の赤い屋根
とんがり帽子の時計台
鐘が鳴ります　キンコンカン
メーメー子山羊も啼いてます
風がそよそよ丘の家
黄色いお窓は俺らの家よ

緑の丘の麦畑
俺らが一人でいる時に
鐘が鳴ります　キンコンカン
鳴る鳴る鐘は父母の
元気でいろよ言う声よ
口笛吹いて俺らは元気

とんがり帽子の時計台
夜になったら星が出る
鐘が鳴ります　キンコンカン
俺らはかえる屋根の下
父さん母さんいないけど
丘のあの窓俺らの家よ

おやすみなさい　空の星
おやすみなさい　仲間たち
鐘が鳴ります　キンコンカン
昨日にまさる　今日よりも
明日はもっと幸せに
みんななかよく　おやすみなさい

4/22
「からたちの花」は、「この道」と同じく北原白秋・山田耕筰のコンビによるものですが、こちらは山田耕筰の少年時代の辛かった思い出を白秋が詞に書き上げたものだということです。

『からたちの花』
北原白秋作詞、山田耕筰作曲

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。
青い青い針のとげだよ。

からたちは畑の垣根よ。
いつもいつもとほる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。
まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。
みんなみんなやさしかつたよ。

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

4/22
札幌、時計台と来て思い出すのは「この道」です。作詞者の北原白秋が北海道を訪れたのは大正 14 年 8 月のことで、当時４０歳。鉄道省主催の「樺太観光団」に参加した帰りに札幌に寄って、4 日間滞在し、北大植物園や北海道大学構内、月寒種羊場（現在の羊ヶ丘牧場）、真駒内牧場、定山渓温泉などを観光してその時のイメージを元に作られたらしい、ということです(Wikipedia による)。

『この道』
北原白秋作詞、山田耕筰作曲

この道はいつか来た道
ああ そうだよ
あかしやの花が咲いてる

あの丘はいつか見た丘
ああ そうだよ
ほら 白い時計台だよ

この道はいつか来た道
ああ そうだよ
お母さまと馬車で来た道

あの雲もいつか見た雲
ああ そうだよ
山査子(サンザシ)の枝も垂れてる

4/21
1980 年の 4 月に留学先から直接札幌に赴任し、当地での 10 年間の生活が始まりました。4 月というのに建物の北側にはまだ雪が残っているのを見て驚いたことを思い出します。

『時計台の鐘』
札幌市のシンボルにもなっている時計台の鐘は 1881（明治 14）年、札幌農学校の演武場に設置されたものです。札幌農学校はそれに先立つ明治 9 年 8 月 14 日(=北大創立記念日)にクラークらの教師陣を迎えて設立されたました。時計台の鐘はクラーク博士の後をついで 2 代目の教頭となったホィーラーがアメリカはニューヨークのハワード商会に注文したということです。東京開成学校と東京医学校を合わせて東京大学が設立されたのが半年後の明治 10 年であることを考えますと、札幌農学校の設立はずいぶん早かったと改めて思われます。
時計台の位置が元の北 2 条(演武場跡)から 100m 南(北 1 条)の現在の位置に移されたのは 1906(明治 39)年のことだそうです。「演武場」から「時計台」と呼ばれるようになったのは、農学校が移転して札幌区が跡地を借り受けてからなんですね。

二木紘三氏のコラムによれば、昭和 2 年（1927） 3 月、バイオリニスト高階哲夫（たかしな・てつお）が妻でアルト歌手のます子とともに札幌でコンサートを行った際、札幌の町の印象をまとめたのがこの曲です、ということです。

『時計台の鐘』
高階哲夫作詞・作曲

時計台の　鐘が鳴る
大空遠く　ほのぼのと
静かに夜は　明けて来た
ポプラの梢（こずえ）に　日は照り出して
きれいな朝（あした）に　なりました
時計台の　鐘が鳴る

時計台の　鐘が鳴る
アカシヤの樹に　日は落ちて
静かに街も　暮れて行く
山の牧場の　羊の群も
黙ってお家（うち）へ　帰るだろう
時計台の　鐘が鳴る

4/20
『牧場の朝』は、ポプラと鐘が出てくるので、札幌にいた頃、なんとなく北海道の牧場が舞台かと思っていましたが、そうではなくて、福島県の岩瀬牧場だということを Wikipedia で知りました。「鐘が鳴る鳴る　かんかんと」の鐘は、1907 年（明治 40 年）に、オランダのレーワルデンの酪農家からホルスタイン種牛 13 頭を輸入した際に、日蘭友好の記念として岩瀬牧場に贈られたものだということです。これもなぜか懐かしさを誘う歌。

『牧場の朝』
作詞（定説)杉村楚人冠、作曲 舟橋栄吉、編曲 若松正司

1. ただ一面に立ちこめた
　牧場の朝の霧の海
　ポプラ並木のうっすりと
　黒い底から勇ましく
　鐘が鳴る鳴るかんかんと

2. もう起き出した小舎小舎の
　あたりに高い人の声
　霧に包まれあちこちに
　動く羊の幾群の
　鈴が鳴る鳴るりんりんと

3. 今さし昇る日の影に
　　夢からさめた森や山
　　あかい光に染められた
　　遠い野末に牧童の
　　笛が鳴る鳴るぴいぴいと

4/17
日頃見慣れた多摩川ですが、昨日川を見つめるうちに
浮かんできた歌は美空ひばりの「川の流れのように」。この歌は音域が広いので、ふつうに歌い始めると、上が出なくなります:

川の流れのように
作詞：秋元康 作曲：見岳章

知らず知らず 歩いて来た
細く長いこの道
振り返れば 遥か遠く
故郷が見える
でこぼこ道や 曲がりくねった道
地図さえない それもまた人生
ああ川の流れのように ゆるやかに
いくつも 時代は過ぎて
ああ川の流れのように とめどなく
空が黄昏に 染まるだけ

生きることは 旅すること
終わりのない この道
愛する人 そばに連れて
夢探しながら
雨に降られて ぬかるんだ道でも
いつかはまた 晴れる日が来るから
ああ川の流れのように おだやかに
この身をまかせていたい
ああ川の流れのように 移りゆく

季節 雪どけを待ちながら

ああ川の流れのように おだやかに
この身をまかせていたい
ああ川の流れのように いつまでも
青いせせらぎを 聞きながら

ついでに方丈記の出だしから:

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、高き、卑しき、人のすまひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。あるは去年焼けて今年作れり。あるは大家滅びて小家となる。

住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水のあわにぞ似たりける。

4/13
入学式の季節も終わって大学では授業が始まっています。自分の入学式の記憶はだいぶ薄らいでしまいましたが、1968 年 4 月でした。入場して式典が始まる頃、2 階席のオーケストラがブラームスの『大学祝典序曲』(Akademische Festouvertüre c-Moll op. 80) を演奏していました。この曲には、4 つのドイツの学生歌が含まれていますが、最後のラテン語の Gaudeamus igitur 『ガウデアムス (いざ楽しまん)』が日本ではよく歌われている(いた)のではないでしょうか?
(内容は覚えていませんが、大河内総長(太った豚より痩せたソクラテスになれ!?)の新入生を迎える祝辞が終わる頃には外がだいぶ騒がしくなり、材木で裏口?を壊す音が聞こえてきて、危険だということで途中で入学式が中止になったと思いました。6 月に入って学生による講義室の封鎖となって 8 カ月近く授業のない日が続きました。)

最初に岡本敏明作詞の学生歌、次にラテン語の元歌、終わりに宇野 道義による意訳を載せます。

「学生歌」
岡本敏明作詞・ドイツ学生歌

わが行(ゆ)く道は　はるけき彼方(かなた)
わが行く道は　はるけき彼方
望みにわが胸　高なり踊るよ
歌声たかく　勇みて進め

わが行く道は　はるけき彼方
わが行く道は　はるけき彼方
嵐は猛(たけ)るも　ひるまじ若人
歌声たかく　勇みて進め

わが行く道は　はるけき彼方
わが行く道は　はるけき彼方
手をとれわが友　腕組めわが友
歌声たかく　勇みて進め

Gaudeamus igitur, juvenes dum sumus,
post jucundam juventutem,
post molestan senectutem,
nos habebit humus.

Vivat academia, vivant professores,
vivat membrum quodlibet,
vivant membra quaelibet,
semper sint in flore!

Vivant omnes virgines, faciles, formosae,
vivant et mulieres,
tenerae, amabiles,
bonae, laborisae!

Vivat et respublica et qui illam regit,
vivat nostra civitas,

maecenatum caritas,
quae nos hic protegit!

さあ陽気にやろう 僕らが若い間に
憂いのない青春時代を経て
暗い老年時代を経て
僕たちは大地に帰るのだから

健在なれ大学よ 健在なれ教授よ
健在なれ朋友よ
健在なれ同友よ
永遠に花と栄えるように！

麗しく可愛い乙女子よ 健在なれ
精励なる婦人たちよ 健在なれ
たおやかで 愛らしく
心根も優しく 誠実であれ！

国家よ それを司る者よ 健在なれ
町よ 健在なれ
われらを守る愛と保護の庇護者よ
健在なれ！

（宇野 道義訳）

4/8
2 週間ほど前になりますが、孫が元気に満 1 歳の誕生日を迎えました。抱いてみて、ずっしりと重くなったのに驚きました: Happy Birthday to you.

"Happy birthday to you"
米国 Mildred J. and Patty S. Hill(姉妹)の作詞・作曲した「Good Morning to All」の替え歌。

Happy birthday to you,
Happy birthday to you,
Happy birthday, dear Akari.
Happy birthday to you.

元歌は
Good morning to you,
Good morning to you,
Good morning, dear children,
Good morning to all.

4/7
昨日はキャンパスの桜も満開。三原先生から投稿があったように、付属科学技術高等学校の入学式がありました。20 年前、まだ工学部付属高校だった頃、社会人のための夜間学校で 7 年ほど生化学を教えました。少人数でしたが、とても熱心な聴講生方で、たまにこちらが教わることもありました。今でも覚えているのは、蛍の発光を触媒するルシフェラーゼという酵素の話をしたとき、授業のあとで、保健所に勤めていらっしゃるという方が来られて、私はあれを仕事で使っているということでした。なんでも、交通事故や殺人事件で人が亡くなったときに、警察から電話があると飛んで行って、遺体から試料を採取して、ATP を定量して死亡推定時刻を求めるのに使うのだそうで、なるほどそういう応用があるかと、納得したことでした。

桜といえば、やはりこの歌:

『さくらさくら』
日本古謡　作者不詳

さくら　さくら
やよいの空は　見わたす限り
かすみか雲か　匂いぞ出ずる
いざやいざや　見にゆかん

もう一つのバージョンは

さくら さくら
野山も里も　　見わたす限り
かすみか雲か　　朝日ににおう
さくら さくら　　花ざかり

ついでに詩をひとつ

甃のうへ　　三好達治

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかの跫音〔あしおと〕空にながれ
をりふしに瞳をあげて
翳〔かげ〕りなきみ寺の春をすぎゆくなり
み寺の甍〔いらか〕みどりにうるほひ
廂〔ひさし〕々に
風鐸〔ふうたく〕のすがたしづかなれば
ひとりなる
わが身の影をあゆまする甃〔いし〕のうへ

4/5
少しひんやりした風が心地よい朝です。
昼間は気温が上がりそう: 緑のそよ風

『緑のそよ風』
作詞: 清水かつら　作曲: 草川信

みどりのそよ風　いい日だね
ちょうちょもひらひら　豆のはな
七色畑（なないろばたけ）に　妹の
つまみ菜摘む手が　かわいいな

みどりのそよ風　いい日だね
ぶらんこゆりましょ　歌いましょ
巣箱の丸窓　ねんねどり
ときどきおつむが　のぞいてる

みどりのそよ風　いい日だね
ボールがぽんぽん　ストライク

打たせりゃ二塁の　すべり込み
セーフだおでこの　汗をふく

みどりのそよ風　いい日だね
小川のふなつり　うきが浮く
静かなさざなみ　はねあげて
きらきら金ぶな　嬉しいな

みどりのそよ風　いい日だね
遊びにいこうよ　丘越えて
あの子のおうちの　花ばたけ
もうじき苺も　摘めるとさ

4/3
隅田川ならぬ多摩川ですが、見晴らし公園や近くの桜がだいぶ咲いてきました: 「花」

花
武島 羽衣作詞　瀧 廉太郎 作曲

春のうららの　隅田川
のぼりくだりの　船人が
櫂（かひ）のしづくも　花と散る
ながめを何に　たとふべき

見ずやあけぼの　露浴びて
われにもの言ふ　桜木を
見ずや夕ぐれ　手をのべて
われさしまねく　青柳（あおやぎ）を

錦おりなす　長堤（ちょうてい）に
くるればのぼる　おぼろ月
げに一刻も　千金の
ながめを何に　たとふべき

4/2
下記の子守歌ですが、作詞者か曲の由来をご存知の方ありましたら教えていただけませんでしょうか？

この子守歌は歌詞を下記のように覚えていて、モーツァルトのピアノソナタイ長調 K331 の 1 楽章主題と変奏曲の「主題」に乗って歌います。
これまでどんな歌でも表題か歌詞の一部を使って Google で検索するとすぐに見つかりましたが、これは見つかりません。何人かの方に伺ってみましたが分かりませんでした。先日兄に会った時に聞いてみたら、驚いたことによく覚えていて、そうすると、子供の頃、私どもの家で歌っていたものかもしれない、ということになりました。。。

眠れよ いとし子 静かに眠れ
表は 木枯らし 吹きゆくばかり
けれどもそばには やさし母の 歌声
暖かき 春の日の 陽ざしのように

iPhone から送信